

結果構文と非下位範疇化名詞句

奥 野 浩 子

1. はじめに

英語の結果構文には、結果句は動詞の直後の名詞句を叙述するもので、主語や前置詞補部の叙述はできないという「直接目的語制限」(Direct Object Restriction, 以下DORとする)があることが知られている(Levin and Rappaport Hovav (1995))。この制限は、結果構文を「動作主が対象に働きかけて、その働きかけにより、対象が変化を起こしてある結果にいたることを表す」ものであると規定していると解釈できる。受動文の主語や非対格動詞の主語は結果句の叙述対象になれるので、ここでいう「直接目的語」とは、表面的な目的語ではなく、「内項」のことであるから、むしろ、「内項の制限」というのが正確であるが(影山(編)(2001)参照)、以下、直接目的語制限という用語を採用することにする。

非能格動詞¹は、内項(直接目的語)を持たないため、DORを満たすために、動詞の後ろに、結果句の叙述対象となる非下位範疇化名詞句の出現が要求されるが、これは統語的条件といえる。非下位範疇化名詞句の出現は、非能格動詞を含む結果構文に限らず、他動詞の結果構文でもみられる。そこで、本稿の目的は、動詞の自他に関わらず、非下位範疇化名詞句として生じることができるのはどのようなものであるか、その意味的条件を明らかにすることである。

2. 結果構文に生じる非下位範疇化名詞句

Levin and Rappaport Hovav (1995: 39) はCarrier and Randall (1992) を支持して、非下位範疇化名詞句を伴う結果構文に生じる動詞は、非能格動詞と無指定の目的語をとれる動詞に限ると述べている。この主張のうち、「無指定の目的語をとる他動詞しか非下位範疇化名詞句と生起できない」という部分は正しくない。他動詞は、無指定の目的語をとれるかどうかに関わりなく、一定の意味的条件を満たせば非下位範疇化名詞句をとることができる。

2. 1. 非能格動詞と結果構文

非能格動詞は内項を欠くため、結果構文では直接目的語制約を満たすために、動詞の後ろに、結果句の叙述対象となる疑似再帰代名詞や非下位範疇化名詞句をとらなければならない。主語についての結果を叙述したい場合には、(1b)のように主語と同一指示的な再帰代名詞を用いなければならない。また、結果句の叙述対象として、(2)のように主語の譲渡不可能な所有物を表す属格名詞句を用いることもできる。

- (1) a. *Dora shouted hoarse.
 b. Dora shouted herself hoarse.
- (2) a. Sylvester cried his eyes out.
 b. Valentino ... winds up strutting his life away in the town square with his sister's blessing.
- ((1) - (2)ともLevin and Rappaport Hovav, 1995: 35-36)

結果構文は、動詞が表す動作の結果を叙述するものである。非能格動詞では、その表す動作に参与するのは主語のみであるから、動作の結果は、主語自身やその身体の一部、あるいはその主語しか所有しえないものについて述べられることには説明を要しない。主語の身体の一部とその主語しか所有しえないものを合わせて、主語と「全体 - 部分」の関係にあるものと捉えてもさしつかえない。さらに、(3)のように、単なる主語の所有物も非下位範疇化名詞句として許される。

- (3) a. The joggers ran their Nikes threadbare. (Carrier and Randall, 1992: 173)
 b. We ran the soles off our shoes. (Levin and Rappaport Hovav, 1995: 59)
 c. He sneezed his handkerchief completely soggy (Carrier and Randall, 1992: 173)

(3a,b)の非下位範疇化名詞句は、主語が身につけているシューズであり、(3c)では、主語がくしゃみした時に使った自分のハンカチである。このような、主語が身につけているものを表す非下位範疇化名詞句は、主語と「接触」しているととらえることができる。

(1) - (3)の例から、非能格動詞を含む結果構文で、結果句の叙述対象となる非下位範疇化名詞句として許されるのは、①主語そのもの、②主語の「部分」、③主語と「接触」しているもの、と3種類が可能であるといえる。非能格動詞で表される動作に参与するのは、主語だけであるから、動詞が表す動作の結果は、「主語を含め主語に関わるもの」であるのは当然のことである。以下、この3種類のうち「接触」という概念が、結果構文の非下位範疇化名詞句の出現に関わることを、少し詳しくみていくことにする。

次の例のように、疑似再帰代名詞でも属格名詞句でもない名詞句が生じる場合もあるが、ここでも、主語と非下位範疇化名詞句の「接触」があると考えることができる。

- (4) a. You may sleep it [= the baby] quiet again ... (Levin and Rappaport Hovav, 1995: 36)
 b. The children rolled the grass flat. (Rappaport Hovav and Levin, 2000: 274)
 c. The joggers ran the pavement thin. (Hoekstra, 1988: 114)

(4a)では、主語が赤ん坊を寝かしつける状況で、主語と赤ん坊に「接触」があると考えられ、(4b)では、主語が草地を転がるのであるから、草地に「接触」しているし、(4c)でも、主語が舗道を走るので、舗道に「接触」している。(1) - (3)の例では、再帰代名詞や属格代名詞により、形態から主語との関連が表されるが、(4)では、動詞が表す動作に関連して、主語との「接触」が表

される。

次のような放出動詞を含む結果構文でも「接触」が関わっていると考えられる。

- (5) a. … the dog barked him awake. (Levin and Rappaport Hovav, 1995: 36)
- b. Marc coughed the napkin off the table. (Boas 2003: 272)
- c. They laughed the poor guy out of the auditorium. (Goldberg 1995: 173)
- d. John laughed tomato soup up his nose. (Verspoor 1997: 115)
- e. The professor lectured the class into a stupor. (Carrier and Randall 1992: 215)
- f. The phone rang me out of my slumber. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 67)
- g. Elena sneezed the foam off the cappuccino. (Goldberg 1997: 384)

(5) では、音や息が出てある結果を招いたことが表されている。たとえば、(5a) では、犬の「吠える声」が彼に届いて「彼が目をさましたことが」、(5b) では、咳をした時に勢いよく「息がナプキンにかかって」ナプキンがテーブルから落ちてしまったことが、(5c) では、「笑い声が彼に聞こえて」彼がいたたまれなくなって出て行ったことが表されている。このように考えると、主語によって放出されたものと「接触」するものが非下位範疇化名詞句として現れていると捉えることができる。ここでも(4)と同様、動詞の意味から、主語が放出したものと「接触」が結果構文を成立させている。

非能格動詞を含む結果構文では、主語と同一指示的な代名詞の出現や動詞の意味から、「主語との関連」があれば非下位範疇化名詞句として生じることができる。

2. 2. 無指定目的語をとる動詞と結果構文

無指定の目的語をとる動詞は、本来、他動詞であるが目的語を省略してもその目的語が何かかわかる動詞と考えることができる。このような動詞を含む結果構文では、疑似再帰代名詞や非下位範疇化名詞句をとることができるといわれているが、これらの非下位範疇化名詞句の特徴を考えてみることにする。((6) の例はすべてL&RH, 1995から引用。)

- (6) a. Sudsy cooked them all into a premature death with her wild food.
- b. I'm glad you didn't stay at the Club drinking yourself dottier.
- c. Having … drunk the teapot dry.
- d. Drive your engine clean.

省略されている無指定の目的語と非下位範疇化名詞句の関係のみてみよう。(6a) では、無指定の目的語「料理」を「摂取した人」が目的語として現れている。(6b) では、無指定の目的語「アルコール」を「摂取した人」が目的語として現れている。(6c) では、無指定の目的語「茶」が入っていた「容器」が、(6d) では、無指定の目的語「車」の部分である「エンジン」が目的語として

現れている。(6a,b)のように、飲食物とそれを摂取した人の関係は、「接触」の関係と言えるし、(6c)のように、内容物と容器も「接触」の関係と言える。したがって、無指定の目的語をとる動詞を含む結果構文でも、非能格動詞の場合と同様、無指定の目的語と「接触」の関係にあるものか、無指定の目的語の「部分」に相当するものが、非下位範疇化目的語として生起できることがわかる。言い換えると、「無指定の目的語と関連」があれば、非下位範疇化目的語として生起できることになる。他の文献にも次のような例があるが、同じように説明することができる。

- (7) a. The chef cooked the kitchen walls black. (Carrier & Randall 1992: 184)
 b. Fred cooked the stove black. (Jackendoff 1997: 544)
 c. Christian drank his glass dry. (Boas 2003: 113)
 d. He probably drank the clubhouse dry. (BNC: J1H)
 e. Stephan ate his plate clean. (Boas 2003: 113)
 f. The cattle ate the field bare. (Rappaport Hovav and Levin 1996: 1)
 g. Jackie painted the brush to pieces. (Boas 2003: 256)

(7a)では、調理の場所が非下位範疇化目的語として表されているが、無指定の目的語である「具材」と、広い意味での「接触」、あるいは、「具材」と接触関係にある「火」との「接触」と考えられる。(7b)では、「具材」が入っている「調理器具」と「接触」している「コンロ」が非下位範疇化目的語である。(7c)では、「飲みもの」が入っていた「容器」が非下位範疇化目的語であり、(7d)では、さらに広く、「飲みもの」と「容器」の両方を含む「場所」が非下位範疇化目的語になっている。こうした包含関係は「部分」とも「接触」とも考えることができる。(7e)では、「食べ物」と「皿」の「接触」は明白である。(7f)では、無指定の目的語である「草」とそれが生えていた「草地」の間に「接触」の関係がある。(7g)では、「ペンキ」のついた「刷毛」が非下位範疇化目的語として表されている。

無指定の目的語をとる動詞の結果構文の場合も、省略されて了解されている目的語と「全体 - 部分」の関係にあるものと、それと「接触」しているものが非下位範疇化目的語として生じることができるといえる。

2. 3. 「wash文」: Levin and Rappaport Hovav (1995)

L&RH (1995) は、目的語の省略を許さない他動詞では、非下位範疇化名詞句の出現が許されないと主張する。例えば、*destroy*は(8b)が示すように目的語の省略が許されない動詞である。この動詞は、非下位範疇化目的語を伴って(8c)のような結果構文を作ることはできない。

- (8) a. The bombing destroyed the city.
 b. *The bombing destroyed.
 c. *The bombing destroyed the residents homeless.

このような議論から、L&RH (1995) は、非下位範疇化名詞句は、非能格動詞と無指定目的語をとれる動詞に限って可能であるというC&R (1992) を支持している。この主張に関連して、彼女たちは、Hoekstra (1988) が結果構文としてあげている (9) のような例に、(10) のような類似の例を加えて「wash文」と呼び、このような例は結果構文ではないと論じている。

- (9) a. He washed the soap out of his eyes. (Hoekstra 1988: 116)
b. He shaved his hair off. (*Ibid.*)
c. They wrung a confession out of him. (*Ibid.*)
d. He rubbed the tiredness out his eyes. (*Ibid.*)
- (10) a. The weaver rinsed the dye out of the material. (L&RH 1995:65)
b. The builder scraped the putty off the window frames. (*Ibid.*)
c. Sylvia filed the serial number off. (*Ibid.*)

(9) (10) では、他動詞が非下位範疇化目的語を伴っていて、それに後続する前置詞句が非下位範疇化目的語を叙述する結果構文のように思われるが、彼女たちは、wash文は結果構文ではないと主張している。その論拠として、まず、wash文は全て「除去」の解釈をもち、結果句とみえるものは、除去される場所を表す前置詞句で、(11) のように形容詞句が生じることはない (L&RH 1995: 66)。

- (11) a. *I washed the soap slippery.
b. *I filed my parents edgy.

さらに、wash文では、前置詞の目的語が動詞の目的語に相当し (12a)、前置詞句は必須の要素で省略することができない (12b)。

- (12) a. He washed his eyes.
b. *He washed the soap.

したがって、wash文では、動詞が「動きを伴う接触の動詞」から「除去の動詞」へと意味転換を起こしており結果構文ではないとして、非下位範疇化名詞句を許す結果構文は非能格動詞と無指定目的語を取れる動詞に限るとするのがL&RH (1995) の主張である。

3. 非下位範疇化目的語を含む他動詞の結果構文

しかし、他動詞が非下位範疇化目的語をとり、本来の目的語が前置詞句に現れる結果構文は他にもある。

- (13) a. The lumberjack rolled the bark off the log. (L&RH 1992:256)
 b. … They … watched a duckling kick itself free of its shell. (L&RH 1999: (39b))

(13a) では、本来の目的語である the log は前置詞の目的語として表され、非下位範疇化目的語 the bark は the log の「部分」あるいは「接触」するものである。(13b) でも、本来の目的語である the shell は前置詞の目的語として表され、非下位範疇化目的語 a duckling が動詞の本来の目的語と「接触」している。しかし、(13) で用いられている動詞は除去の動詞ではない。ここでも、非下位範疇化目的語と本来の目的語の関係は「接触」である。

さらに、次のような例もある。(14) で用いられている動詞は (15) が示すとおり、目的語の省略を許さない動詞である。

- (14) a. Sue swept the broom to pieces. (Boas 2003: 7)
 b. Bernie fried the pan black. (Boas 2003: 113)
 c. Cinderella scrubbed her fingers to the bone. (RH&L 1998: 103)
- (15) a. *Sue swept.
 b. *Bernie fried.
 c. *Cinderella scrubbed.

(14) の非下位範疇化目的語は、動詞が表す動作で使用される道具である。(14a) では、掃除に使う「ほうき」で、(14b) では、油料理に使う「フライパン」で、(14c) では、磨く作業に使う「自分の手指」である。このような道具は、それぞれの動詞について考えられる本来の目的語と「接触」しているものである。つまり、「ほうき」は、*sweep* の本来の目的語である「平面」と接触するものであり、「フライパン」は、*fry* の本来の目的語である「具材」と接触するものであり、「彼女の指」は、*scrub* の本来の目的語「平面」と接触するものである。(13) では、本来の目的語が前置詞句の目的語として表されているが、(14) では、本来の目的語は動詞の意味から復元し、それとの「接触」が非下位範疇化目的語の出現を可能にしていると考えられる。

さらに、次のような例でも、用いられている動詞は目的語の省略を許さないもので、本来の目的語も表されていない結果構文である。

- (16) a. Sam cut himself free. (Goldberg 1995: 194)
 b. Smitty cut himself loose. (*Ibid.*)

このような文では、主語が自分自身を切りつけて逃げたという解釈はなく、ロープか何か彼を拘束しているものを切って自由になったことを表している。ここでも、本来の目的語である「拘束するもの」と「接触」するものである「人間」が非下位範疇化目的語として生じている。

次の (17) は、再帰代名詞でない名詞句が非下位範疇化目的語として生じている例で、(18) は、

非下位範疇化目的語に加えて、「拘束するもの」をcutするのに用いた道具を表すwith句が共起している例である。

- (17) a. Firemen and a passer-by dragged him to the bank after cutting his trapped legs free from the canoe. (BNC: CBF)
b. It took firemen nearly two hours to cut eight passengers free. (BNC: CEN)
- (18) a. The couple turned up at Richmond station and a firemen cut them free with a hacksaw. (BNC: K4W)
b. With his dirk he cut her free. (BNC: APW)
c. He cut her other bonds free with a kitchen knife. (BNC: GUF)

非下位範疇化目的語は、主語とは別のもので、主語が、誰か他の人を拘束しているものを切って、拘束をといてやったことが表されている。ここでも、非下位範疇化目的語と本来の目的語には「接触」の関係がある。

他動詞が本来の目的語ではなく非下位範疇化目的語をとれるのは、本来の目的語と「全体 - 部分」の関係にあるものと、それと「接触」している場合であることがわかった。本来の目的語は、前置詞とともに文中に現れるか、動詞の意味から復元できるものである。

4. 「wash文」再考

ここで、もう一度、wash文を考えてみよう。ある場所から何かを除去するという場合、除去されるものと場所は「接触」していると捉えることができることを確認してみよう。先にあげたwash文を再度あげることにする。

- (9) a. He washed the soap out of his eyes. (Hoekstra 1988: 116)
b. He shaved his hair off. (Ibid.)
c. They wrung a confession out of him. (Ibid.)
d. He rubbed the tiredness out his eyes. (Ibid.)
- (10) a. The weaver rinsed the dye out of the material. (L&RH 1995:65)
b. The builder scraped the putty off the window frames. (Ibid.)
c. Sylvia filed the serial number off. (Ibid.)

(9a)では、前置詞の目的語「彼の目」が本来の目的語で、それと接触する「せっけん」が非下位範疇化目的語である。(9b)では、前置詞の目的語が表されていないが、主語の頭や顔など、「身体の部分」であり、そこに生えている「体毛」が非下位範疇化目的語である。(9c)では、動詞が比喩的に用いられているが、前置詞句の目的語である「彼」と非下位範疇化目的語の間には、抽象的な所有関係が成り立つ。このような所有関係は、(2b)でみた譲渡不可能な所有と同じもので、本稿

では「全体 - 部分」の関係と捉えてきたものである。(9d)では、前置詞の目的語と非下位範疇化目的語の間に、抽象的な「接触」の関係が読み取れる。(10a)と(10b)でも、全く同じで、前置詞の目的語と非下位範疇化目的語は「接触」している。(10c)は、(9b)と同様、前置詞の目的語が欠けているが、非下位範疇化目的語「シリアルナンバー」がふられていた場所であり、ナンバーとそれがふられていた場所は「全体 - 部分」の関係とも「接触」の関係とも捉えることができる。

したがって、wash文は非下位範疇化目的語を含む結果構文であるといえる。その非下位範疇化目的語の出現は、他の他動詞の場合と同じ条件で許されているものである。

4. おわりに

本稿では、結果構文の非下位範疇化名詞句の出現に対する意味的な条件を明らかにした。非能格動詞の場合、非下位範疇化名詞句として出現できるのは、「主語に関わるもの」でなければならない①主語そのもの、②主語の「部分」であるもの、③主語と「接触」しているもの、の3種類がある。

無指定目的語をとる動詞を含めた他動詞の場合、非下位範疇化目的語として出現できるのは、「本来の目的語に関わるもの」でなければならない、①本来の目的語の「部分」であるものと②本来の目的語と「接触」しているものである。

最後に、動詞の意味に変化・結果を含む「状態変化動詞」は、動詞の意味に含まれる結果をさらに詳しく述べるものが結果句として生じる場合だけ許されるということは広く知られている。また、Rappaport Hovav and Levin (1998: 103)は、状態変化動詞を表す他動詞は非下位範疇化目的語と共起できないと述べて、(19)のような例をあげている。しかし、(20)では、状態変化他動詞が非下位範疇化目的語を伴って結果構文に生じている。

- (19) a. *The clumsy child broke his knuckles to the bone.
b. *The clumsy child broke the beauty out of the vase.

- (20) a. Kelly broke the branch off the tree. (RH&L 1998:123, fn 18)
b. She broke a grape off the bunch. (Goldberg 2001: 522)
b. Sam sawed a piece off the block. (Goldberg 1995: 154)
c. Sam tore a piece off the block. (Ibid.)

(19)と(20)にどのような違いがあるのか、状態変化動詞が結果構文に生じるにはどのような制限があるのかについては今後の課題としたい。

また、本来の目的語が前置詞句内に表され、非下位範疇化目的語をとるLevin and Rapoport (1988)が「a hole構文」という(21)のような例も含めて、非下位範疇化目的語の出現にどのような原理が作用しているかを探るのも今後の課題である。

- (21) a. Matilda poked a hole in the rice paper screen (with her cane) . (L&R 1988:278)
 b. Stephanie burned a hole in her coat. (Ibid.)
 c. John hammered a hole through the wall. (Boas 2003: 120)

注

¹ 非対格動詞の主語は内項であるため、非能格動詞とは違い、主語に直接、結果句が叙述される形が許される。むしろ、動詞の後ろに非下位範疇化名詞句をおくと非文法的な文になる。

- (i) a. *During the spring thaw, the boulders rolled the hillside bare.
 b. *The rice slowly cooked the pot black.
 c. *The snow melted the road slushy. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 39)

参考文献

- Boas, Hans Christian (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The argument structure and syntactic structure of resultatives," *LI* 23-2, 173-234.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Constructional Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- _____ (1997) "The relationship between verbs and constructions," Verspoor, Marjolijn, Kee Dong Lee and Eve Sweetser (eds.) *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning*, Amsterdam: John Benjamins, 383-398.
- _____ (2001) "Patient arguments of causative verbs can be omitted: the role of information structure in argument distribution," *Language Sciences* 23, 503-524.
- Hoekstra, Teun (1988) "Small clause resultatives," *Lingua* 74, 101-139.
- Levin, Beth (1999) "Objecthood: An event structure perspective," *CLS* 35, 223-247.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1992) "The lexical semantics of verbs of motion: the perspective from unaccusativity," Roca, I.M. (ed.) *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Berlin: Foris, 247-269.
- _____ (1996) "Lexical semantics and syntactic structure," Lappin, Shalom (ed.) *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, Blackwell, 487-507.
- _____ (1999) "Two structures for compositionally derived events," ms.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport (1988) "Lexical subordination," *CLS* 24, 275-289.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1996) "Two types of derived accomplishments" ms.
- _____ (1998) "Building verb meanings," Butt Miriam and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, CSLI, Stanford, 97-133.
- _____ (2000) "Classifying single argument verbs," Coopmans, Peter, Martin Everaert and Jane Grimshaw (eds.) *Lexical Specification and Insertion*, Amsterdam: John Benjamins Publishing, 269-303.
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives," Levin, Lori, M. Rappaport and A.Zaenen (eds.) *Papers in Lexical-Functional Grammar*, Indiana University Linguistics Club, 143-157.